



Title	特定妊婦と関わる地域助産師の実践の現象学的記述 : 母親と社会をつなげる支援
Author(s)	生駒, 妙香
Citation	臨床実践の現象学. 2022, 5(1), p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86916
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特定妊婦と関わる地域助産師の実践の現象学的記述 —母親と社会をつなげる支援—

A Phenomenological Description of the Practice of Community Midwives Caring for
Tokutei Ninpu (Socially Vulnerable Pregnant Women)
: Support for Linking Mothers and Society

大阪大学大学院人間科学研究科 生駒妙香

I. はじめに

子ども虐待にまつわる痛ましい事件が後を絶たない。「子ども虐待による死亡事例等の検証結果(第15次報告)」(厚生労働省, 2019)では, 1年間で65人の命が奪われ, 亡くなった子どもたちの5割以上が0歳児であった。特に重大であると考えられる事例の個別ヒアリング調査では, そのすべてが特定妊婦として把握されていた。特定妊婦は2008年の児童福祉法の改正で, 「出産後の養育について, 出産前の支援が特に必要な妊婦」として法的に位置づけられた。0歳児の虐待死が多い背景から, 虐待防止対策は出産後の支援ではなく, 妊娠期からの継続した支援へとシフトされた。「子ども虐待対応の手引き」(厚生労働省, 2013)における特定妊婦の考え方では, すでに養育の問題がある妊婦, 支援者がいない妊婦, 望まない妊娠をした妊婦, 若年妊婦, こころの問題がある妊婦, 経済的に困窮している妊婦, 未受診妊婦などが示されている。

法制化以降, 特定妊婦は要保護児童対策地域協議会に登録され, 多職種連携の中でケアされるようになった。虐待により死亡に至った事例でも, 保健機関, 医療機関, 児童相談所など, いずれかの関係機関と何らかの接点があった。にもかかわらず継続した関わりが非常に難しい現状がある(上野, 2019)。病院で未受診妊婦と関わる看護職では, 使命感とともに未受診妊婦に共感できないといった思いが示され(内村ら, 2019), 地域で虐待予防に関わる保健師でも支援関係の構築の難しさが報告されている(佐藤ら, 2021)。すでに養育に問題があるとされる親たちは, 自身が様々な苦悩や困難を抱えている。その困難性は支援者が親たちと支援関係を結ぼうとするときにも顕在化し対立関係を生みやすい(佐野, 2020)。そのため支援者は関係形成の構築に悩んだり, 疲弊したりすることがある。

一方, 地域の養育支援訪問で特定妊婦の甘えをSOSとして受け止める助産師の語り(村上, 2019)では, 助産師は対象のSOSを受け止めてくれる相手であり甘えを許す存在として, 支援が成立した場面が描かれている。助産師は妊娠を契機に特定妊婦と出会い, 出産や育児への支援をしており, 地域においては訪問指導をとおした継続的な支援も行っている。助産師は妊娠期から育児期において, 特定妊婦と定期的に関われる存在であり, 虐待防止において重要な役割を担っている。

これまでの特定妊婦の研究(佐々木ら, 2020)では, 関係機関の連携や事例報告がほとんどで, 特定妊婦に関わる助産師個人の経験を探求した研究は, 前述(村上, 2019)以外には見当たらない。苦慮したり困難であったりする特定妊婦への関わりについて, すでに経験している助産師の実践を紐解くことは, 特定妊婦への実践が可視化されることにつながる。そして

それは、助産師による虐待防止への支援の一助となる。

そこで本研究では、助産師による特定妊婦への支援は具体的にはいかなるものか、その背景の構造を明らかにし現象学的に記述することを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：現象学的分析による質的記述的研究である。「看護の視点」は習慣化されてはつきりと自覚されていないことから、意識に上がってくる手前の次元からすでに看護職たちは経験している(西村, 2014)。助産師自身の意識化されていない現象を捉えるためには、個人の語りの内側に身を置いて、語りの構成を見て取る現象学的研究(村上, 2017)が最適と考え選択した。
2. 研究協力者：研究協力者のリクルートはネットワーク標本抽出法にて、特定妊婦との関わりの経験をもつ、臨床経験が10年以上の助産師とした。
3. データ収集方法：同意を得た助産師1名に半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は、助産師としての経験、活動内容を確認し、次いで「特定妊婦との関わりの実際」や「特定妊婦との関わりで大切にしていること」を自由に語ってもらった。
4. 分析方法：現象学的研究の方法(村上, 2013)参考に、次の手順で行った。1) インタビュー内容は言い淀みも含めて言語化し逐語録を作成した。2) 逐語録を何度も読み返し語りの意味と全体の文脈を捉えた。3) 語りのなかで、繰り返し使われる言葉や口癖に注目しながら、実践スタイルが現れる語りのテーマを取り出し、できる限り語られた言葉を用いて記述した。4) テーマ間の連関を検討し実践を組み立てている背景の構造を捉えた。分析過程においては、現象学的質的研究者のスーパービジョンを受け妥当性の確保に努めた。また研究協力者に分析内容を確認してもらい実践の記述に矛盾がないかを確認した。
5. 倫理的配慮：本研究は大阪大学人間科学研究科 社会・人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 2020006)。研究協力者には研究協力への自由意思、個人情報とプライバシーの保護を説明し同意を得た。研究協力において心理的葛藤が生じた場合は、直ちに研究協力を辞退できることを説明した。

III. 結果

研究協力者は60歳代の助産師Aさん、約20年の病院勤務を経て、分娩を取り扱わない助産院を開業した。現在は地域保健センターの勤務を兼務して、新生児訪問や養育支援訪問を実施するとともに、開業助産師として育児サークルを主宰している。インタビューは2020年12月に実施、所要時間は81分であった。以下、結果の語りはゴシック体で、省略した部分は(・・・)で、語りのなかで筆者が補足した部分は()で、会話のような表現の箇所は『 』で示した。分析中の語りの引用は「 」で、テーマを支える重要な言葉を〈 〉で示した。各引用末尾に逐語録のページ数を記した。Aは助産師Aさん、Bは筆者である。

1. 社会とつながると母親たちは変化する

Aさんは地域で、看護師や保育士と協働して、「赤ちゃん会」と称した育児サークルを開催している。育児サークルに参加すると母親たちは変化していく。

B：赤ちゃん会(育児サークル)のようなところに来られたら、やっぱりこう変化って。

A：変化すごくあります。

B：ああ、そう。

A：やっぱり誰かとつながってるとか、誰かにすぐ相談できるとかっていう人がいてると、何でしょうかね、もう表情が変わってきはります。私はずっと、そういうのを見てたので、そういうのももちろんね、こういうふうに変わってらっしゃるって。それこそ最初は泣いてね、エジンバラ(産後うつ病質問票)も高くて泣いてたお母さんが、それこそちょっと自信を持って育児ができるようになったり、他のお母さんたちと関われるようになるっていうの、すごく大事だなと思うんですね。(・・・) そのスーパーの上にあるところの広場(百貨店跡地の〇〇で実施している親子広場)みたいなところにも1人で来れるようになって。そうすると、そこに喫茶店みたいな店があるんですけどね、そこで、『赤ちゃんちょっと見とくからお茶飲んどいで』って他のスタッフが言って、他のお母さんと一緒にお茶飲みながらとやってると、その喫茶店のマスターも『あのお母さん変わりましたよね』って言うぐらい、ちょっと笑顔が出たりとか。(・・・) なんかすごくこう表情も変わるし、なんか社会とつながってるっていうの、すごく自信になるなと思うんです。(p3)

母親たちの変化への問いに、「変化すごくあります」と語る。「最初」は泣いていた母親が「自信を持って育児ができる」ようになったり、「他のお母さんたちと関われる」ようになると「笑顔」になる。その変化はAさんたち専門職だけでなく、喫茶店のマスターが気づくほどの変化である。変化の理由を「誰か」とつながっているとか、「誰か」にすぐ相談できるとか、という「誰か」の存在であると考え。つまり育児のなかで、困ったり辛かったりしたときに、「誰か」とつながれたり、「誰か」にすぐに相談できることで、母親たちは育児に自信が持てるようになり変化していく。「誰か」とは、育児サークルを運営する助産師・看護師・保育士といった専門職や、育児サークルを開催している場のコミュニティも含んでいる。さらにこの「誰か」は後に語られる内容から互換可能な開かれた他者と言え。このような場の共有や母親同士のつながりが〈社会とつながる〉ことである。

母親の変化を「ずっと、そういうのを見てた」と語る。そういうのとは、母親が〈社会とつながる〉ことで、自信を持って育児ができるようになる、〈母親たちの変化〉である。このような変化を「ずっと」見てきた経験が、Aさんの実践を支えている。つまりは、〈社会とつながると母親たちは変化する〉という経験から、〈母親と社会をつなげる〉ことが、Aさんの実践の土台となっている。

2. 母親とどのように「つながって」いくのか

2-1 母親が社会とつながる場を提供する

ここではAさんが母親とどのように「つながって」いくのかをみていく。1つ目は〈つながる〉場の提供である。「赤ちゃん会」の開催について次のように語る。

A：(赤ちゃん会を)午前中2時間、午後2時間で、4組さんとか5組さんでやろうって言って、そういうの(赤ちゃん会)も復活してやり始めましたら、もう募集すると4~5分でもう満席になるぐらい。もう来たい方がいて、本当に毎月来てくださる方もいらっしやっ

て、1歳未満の赤ちゃんとお母さんの会にしてるんですけど、もうみんながびっくりするぐらい、『もう4～5分で満席だよ』って、『キャンセル待ちだよ』っていうので、今月からは4組だったのを5組に増やしてやったんですけど、それでもやっぱり、ちょっと、もっとちっちゃい子どもさんね、やっぱ2～3か月で、4か月健診を終わるまでにどっか行きたい場所とか、上の子どもさんいってるので、なかなかいろんなところに行けないとかっていうお母さんのための、たちの、あの、会をまた来月からやろうって。(p2)

Aさんが提供する「赤ちゃん会」は母親たちが集まって話しをしたり、助産師に育児相談ができる場である。その会は4～5分で満席になってキャンセル待ちとなる。「赤ちゃん会」に「来たい」方がいて、毎月「来て」くださる方の存在は、母親たちがそのような「場」を定期的に必要としていることを示している。母親目線の「来たい」とAさん目線の「来て」くださる方が並列で語られることから、母親の願いを受け取る形でAさんが場を提供していることがわかる。その会について「お母さんのための」と言って、「(お母さん)たちの」と言い換えていることから、母親のための会であると同時に、母親たちが主体となって集まる〈お母さんたちの会〉であることを示している。場を提供するのはAさんたち専門職であるが、その場は母親同士が作り出す〈つながり〉の場でもある。

「どっか行きたい場所とか」「なかなか行けないとか」と、「とか」という言葉で、母親たちの姿を表現する一方で、「けど」という言葉で、母親たちのニーズに対応できていない現状が示される。1歳未満に限定している現状に課題を感じているのである。だから「また来月からやろう」と4か月健診までの母親たちへの場の提供を企画するのである。

2-2 助産師の存在を知ってもらう

「つながって」いく方法の2つ目は、助産師の存在を知ってってもらうことである。新生児訪問や養育支援訪問での母親たちの様子を次のように語る。

A：私が訪問に行くんですけどね、やっぱりそういう(赤ちゃん会のような集まれる)場所を探してる人とか、このお母さん、ちょっと家で(子どもと)2人だけだったら、ちょっと1日大変だろうなって。どっかこう息抜きできる場所がないかなっていうようなお母さんがいっぱいいてるんですけど、今は、市からの委託で行ってるので、あんまりこう公に『こういうとこ(Aさんが主宰する育児サークルが)あるよ』って言えないんですけどね。でもまあ、『ちょっと私、今日は市役所から来てるけど、実際はこんなこともしてるのよ』って言って、そこでちょっとあの、皆さんスマホ持ってはるから、『スマホでここ、ホームページ見てみて』とかって『すぐ見てみて』とかって言って見てもらって、ちょっとこう、後に残るようにしてもらって、『もしよかったら来てね』って声はかけるようにしてるんです。そこからちょっと来てくださる方もいらっしやったりするので、はい、なんかちょっと、別にほっといてもいい人ももちろんいてるけど、なんかどっかでつながってきたいなって思うようなお母さんが結構いらっしやるんですよね。黙ってられなくて、そのようにしてます。(p2)

ここでは「ちょっと」が多用されている。「ちょっと」「家で2人だけだったら」、「ちょっ

と」「1日大変だろな」と、Aさんが訪問において心配な母親の様子を「ちょっと」と表現する。一方で、「ちょっと」「今日は市役所から来てるけど、実際はこんなこともしてるのよ」と言っ、主宰する育児サークルを紹介する。「けど」の前後で、Aさんの2つ立場が示され、「今日は」市から委託された訪問であるが、「実際はこんなこと」とAさんの地域での活動を伝える。市の委託での訪問では、助産師個人が運営する育児サークルを紹介することは本来「言えない」ことであるが、「黙ってられなく」て「言っ」ている。それは〈つながり〉たいことを言えない、「なんかどっかでつながっときたい」母親たちの願いを汲み取って、Aさんが代弁するように職権を超えて言う行為となるのである。

そして「ちょっと」「後に残るようにしてもらって」と、助産師の存在を後に残すように関わっている。それは、助産師の存在を〈知っ」てもらう〉ことを糸口とした実践といえる。後述する訪問でも、Aさんは「私知ってるし、私行くわ」(p6)と、訪問に名乗り出ている。これはAさんが「知っ」ただけでなく、その母親がAさんを「知っ」てゐることを関わりの糸口にしてゐる。つまり母親と〈つながる〉前段階として、〈知っ」てもらう〉ことが存在し、「つながって」いく、ひとつの方法と考えていることがわかる。

2-3 ハードルを越えて「一歩踏み出す」支援

ここまでのAさんの実践をみると、育児サークルに参加して〈つながりたい〉母親たちには場の提供を、母親の潜在化した〈つながり〉へのニーズには、助産師の存在を〈知っ」てもらう〉ように情報提供をしておくことが示された。次は〈つながり〉へのハードルを越えて「一歩踏み出す」支援の語りをみていく。

A: 初めてそういう(赤ちゃん)会に参加するような方たちに、やっぱりちょっとこう、ハードルが高くて来れない方もいらっしゃるんで。『初めて来る人ばかりですよ、この日は』っという日を作ろうって言っ、ちょっと今、動いてるとこなんです。(p2)

A: なんかその辺、一歩踏み出すのが、お仕事してたお母さんなんかは、やっぱり周りに知ってる人もいないし、どこに何があるかもご存じない人も結構いらっしゃるんで、行きづらいとかっていうのがあるんですよ。なんかその辺はそういうふうにしたり。私は将来的にはね、産後ケア(事業のデイケア)とかも送迎付きにしたいんです。送迎があれば、『まあ、行ってみようかな』とか、すごく一番『どうやって行こう』っというのが、赤ちゃん連れて、それこそ、抱っこベルトもうまくできないとか、歩いて行くには遠すぎるとか。やっぱり赤ちゃんを連れて出かけるっというのがもう、それ一つでおっくうになって、『もう出かけよう思ったらうんちして』とか、もうなんかその辺も、『この時間に行かなあかん』と思っても、そこに間に合わせて支度をするこゝ自体が、初めてのお母さんできないんですよ。(p4)

Aさんが捉える1つ目の「ハードル」は「知っ」てる人」がいないことである。初めて育児サークルに参加するのは、「ハードルが高くて」「来れない」方もいると、母親の〈行きづらさ〉を捉える。そして、その母親たちのために、「初めて来る人」ばかりの日を作り、〈行きづらさ〉への「ハードル」低くするのである。また「知っ」てる」Aさんが、子育て広場(民間委託している0~3歳くらいまでの育児サークル)での助産師相談を担当するよう調整し

たり、保健師と一緒に付いて行ってもらうことを提案して(p4)、母親と子育て広場に来る他の母親とを〈つなげる〉。「一步踏み出」して参加できれば、あとは子育て広場という〈場〉で、母親は「つながって」いけると考える。

2 つ目は赤ちゃんを連れて出かけること自体の「ハードル」である。「抱っこベルトもうまくできないとか」「出かけようと思ったらうんちしてとか」と複数の「ハードル」を母親目線で「とか」という言葉で表現し、その場にたどり着くまでに「おっくうに」なる母親の姿を想像する。母親のどうにもならない状況を、打開する方法として A さんが考えているのが「送迎」である。「知ってる」人が家まで迎えに来てくれる「送迎」にはその人との約束という状況が生じる。さまざまなハードルで「おっくう」になる気持ちから、「まあ、行ってみようかな」と母親の「一步踏み出す」行為を期待するのである。ここでは、母親の〈つながり〉への障壁を、「ハードル」として捉え、「一步踏み出す」支援がなされていた。

A さんの、母親とどのように「つながっていくのか」の方法をみると、母親の状況に応じて実践が組み立てられており、〈母親と社会をつなげる〉支援が実現化できるように実践が拡げられていた。次は「つながって」いく実践を支える「すぐに相談できる」存在としての助産師の実践スタイルをみていく。

3. 「すぐに相談できる」存在としての助産師

3-1 〈母親の味方〉であることを伝える

この事例は DV(ドメスティック・バイオレンス)支配から抜け出せずに〈つなげれない〉母親を思い無力を感じた特定妊婦との関わりである。A さんは助産師が〈母親の味方〉であることを伝えようとする。

A : (育児サークルに)来てほしいけど来れないお母さんの中に、ちょっと家族間の問題っていうんですかね、ま、ご主人がお仕事してなくて、常に家にいる状況の方とかがあってたんです。今、もうちょっと特(定)妊(婦)に上がってますけど。(p4)

A : たまたまご主人がいない時があって、『お母さん、あのちょっと大変なんじゃないの』って、『もしよかったらお話聞かせて』って言った時に、ちょっと身をこう乗り出してきはったんです。だからきっと話したかったのかなって、その時思ったんだけど、やっぱりあの、『なんかあったらいつでも何でも言ってくれたらいいのよ』って『あなたの味方なんやから、責めたりはしないからね、何でも言ってくれたらいいのよ』っていう時に、ちょっとこう身を乗り出してきはった感じだったんだけど、結局はやっぱり、そこから抜けられなくて。(・・・) なんかその中からどうにかできないものかとかって思うんですけど、やっぱり本人が『今のまんまでいい』って言えばできないのかなとか。(・・・)もうすごく無力だなと思うんです。分かってるのに何もしてあげれない。もう洗脳されてるんですかね、そういうのってね、なんかね。もう、そこからは抜け出せないんだなって。(p5)

A さんは DV を想像して「大変なんじゃないの」と問いかけ、母親の思いを引き出そうとする。それに対して母親はちょっと「身を乗り出し」た。その様子から「きっと話したかったのかな」と、母親の〈話したい〉サインを察知する。さらに「あなたの味方なんやから」と、助産師が〈母親の味方〉であることを言葉で伝え、「責めたりしない」ことを保証をし

つつ、「なんでも言ってくれたらいい」と母親の〈話したい〉思いを後押しするように言葉をかけ、〈相談できる〉助産師の存在を伝えようとする。しかし母親は結局、そこから「抜けられな」かった。

Aさんは「どうにかできないものか」と母親に「味方」であることを伝えるが、母親本人が『今のまんまでいい』って言えばできないのかな、「分かっているのに何もしてあげられない」と、母親と〈つながれない〉ことに「無力」を感じる。そして、夫の居ない場でも洗脳されているように見える母親の背景に目を向け、「一步踏み出す」支援を模索する。夫と母親とを離す方法として、「(産後ケアに)送迎があれば」、「産後ケア(に来て)ちょっと利用してゆっくりしたら(p5-6)」と母親と〈つながる〉方法を考えるのである。ここでは母親の〈つながり〉への「ハードル」として、夫からのDV支配が示されていた。

次は〈つながった〉DV事例である。妊娠中から関わりのあった母親がDVを受けているようだ、その母親の友人から聞いていた。そこで「私知ってるし、私行くわ」と新生児訪問に名乗り出た。

A : (夫から)ちょっときついこと言われたりとかして。ちょっとこうやっぱり言葉の暴力もあるし、なんか『我慢できなかつたら、それは我慢しなくてもいいんだよ』っていう話をして、2回ぐらい訪問に行ったんです。そしたらある時ですね、保健センターに助けを求めに来はって。暴力を受けたんだと。で、そのまんま、シェルターに入りはった(つて)ことなんです。その方は、そこまでにいく間に言葉でも暴力があるし、もちろん手が出るとかっていうのもよくないっていうので、自分から助けてっていう場所を、ここに行ったらいいんだっていうのを、ちゃんと理解して来てくれはった人もいてたんです。(・・・)そういうこともあって、やっぱりこう、誰かいつでも、手を差し出してあげるような、状況までやとくと、自分からそうやってくれる人もいてると思うので。(p6)

「ここに行ったらいいんだ」という場所を理解していた母親は、「自分から助け」を求め行動をとった。その背景には2回の訪問で、「我慢しなくてもいい」ことを話し、つながる場所を伝えていたから、母親は自ら行動を起こすことができた。この場面でもAさんは母親の「我慢」を感じ取り、限界を越えるときには「我慢」しなくていいことを伝えている。それは助産師が〈母親の味方〉であることのメッセージといえる。「味方」がいると感じている母親は、「我慢」できなくなったときに、誰かに「助けを求め」やすい。「手を差し出して」つながれる状況を、手が届く距離として表現し、そのような状況まで支援しておくことが重要だと考える。ここで母親がつながった「誰か」はAさんも所属する保健センターであった。母親にとっては「誰か」の存在が重要で、「いつでも」必要な時に〈つながれる〉ように、Aさんは〈母親の味方〉であろうとするのである。

3-2 母親から見える助産師の「印象」を意識する

ここでは「すぐに相談できる」存在としての助産師の「印象」についての語りをみていく。

A : やっぱりその辺を、(訪問に)行ったときにですね、やっぱり、嫌な印象で迎えられるか、訪問に行ったときにですね、もうなんか、いやでもそう思われるよりは、この人にな

んか相談してみようって思ってもらえるような訪問を心がけてる。(p6)

A: なんかこう、(訪問に)行ったときにどうしても、こう、電話でアポイント取ったりすると、そのときの声とかしゃべり方でなんか印象って決まるじゃないですか、私たちって、そのときに、明るい声でも、行ってみるとすごくしんどいお母さんがいたり、それから結構つけんどんなお母さんでも、行ったらいろんなことね、最初はなんか来てほしくないみたいな感じだけど、行ったらもういろんなことを聞いてくるお母さんがいたりとかするので。こう、あまり先入観持たずにいかなあかんっていうふうには、思ってるんですけど。

B: はい、確かに、確かに。

A: なんか病院とかで、短い入院期間で、すごくそれが嫌だったっていう人がいてますよね。助産師さんに対しての。なんかそういう印象を持たれないようにしないと、やっぱり信頼って、無理なので。(p8)

ここではAさんの訪問での出会い方が示されている。「嫌な印象で迎えられる」のではなく、「この人になんか相談してみよう」って思ってもらえる訪問を心がけると語る。それはAさん自身が「嫌な印象」を与えて「ハードル」とならないための意識である。「来てほしくないみたいな感じだけど」、行ったら「いろんなことを聞いてくる」母親がいることから、「先入観」を持たずに「出会う」ことが大事だと考える。ここでは「けど」に続く逆説的な〈母親の姿〉を強調する思いが示されている。

そして「なにか相談してみよう」と思ってもらえる訪問の前提条件として、母親から見える助産師の「印象」について語る。母親から「嫌な」「そういう印象を持たれない」ようにしないと、母親から信頼されることは難しいと考える。Aさんは「私たちの立場ってお母さんからしたらやっぱり上なんですよ、上から目線じゃないけど、そういうふうに見られてるので(p15)」と母親から見える助産師の立場を捉える。そして「やっぱり、お母さんの目線に立ってほしいなっていうのね。お母さんの気持ちを汲んでほしい(p17)」と後輩助産師たちへの思いを語る。

助産師が「先入観」を持たずに母親と「出会う」、母親と同じ目線に立つこと、そして母親から見える助産師の「印象」を意識することが必要だと考える。言い換えると、「印象」を意識していない状況では、母親から「信頼」されることは無理であり、「なんか相談してみよう」という存在には成り得ず、「つながって」いくことはできないと考えるのである。

3-3 母親からの電話にすぐに駆けつける

本項と次項(3-4)は、「すぐに相談できる」存在としての助産師の実践が示された場面である。「この人になんか相談してみよう」って思ってもらえる訪問で、「意識していることとがありますか」の問いに、「自分ではあんまり意識してないんですけど」と2回繰り返した後、「つけんどんなお母さんとかもいてたりするんですけど」と10代の特定妊婦との関わりを語った。「意識していない」と繰り返すのは、逆に意識していたい思いと読み取れる。

妊娠中に訪問したその母親は、「すごくつけんどん」な態度で、訪問したAさんと保健師は離れた場所で「小さくなって」座っていた。ソファに座った母親とは距離があった。産後すぐの訪問では、最初よりはちょっと「とげが抜けて」というか「丸くなってる」とい

うような態度で、「ちょっと変わったかな」と変化が感じられた。

A: ある時です、電話がかかってきて『赤ちゃん、うんちが出ないんやけど、どうしたらいい?』っていう電話があったんです。で、私、1軒目訪問があったので『そこが終わってから行ってもいい?』って『行くよ』って言ったら『じゃ、来てほしい』って言うから行って、で、赤ちゃんうんちが出ないのでね、いろいろ『こうやってするんだよ』とか、綿棒で刺激『こうやってするんだよ』とかってやりながら、一緒にやってたら、すぐここにそばに、もうそれまでいつも離れてたのに、すぐここに来て、こうやって一緒に見てやってたらね、うんちがもう勢いよく出て、私のスカートに付いたんです。そしたらママ、『ごめんごめん』とかって『おばちゃん、ごめん』って。おばちゃんなんです、私、助産師さんじゃなく、『おばちゃん、ごめん』って言ってスカート拭いてくれたりとか、もうすごい態度がね、全然違ったんですね。(p7)

10代の母親が、出産後、赤ちゃんの「うんちが出ない」心配事をAさんに相談することで、その距離が一気に縮まる。母親の子どもを思う不安な気持ちが、「どうしたらいい?」というSOSを発信する力となっている。訪問してみると、いつも「離れて」いた母親はすぐそばに来て、赤ちゃんの〈うんちの出し方〉をAさんと一緒にやろうとする。うんちが勢いよく飛んでAさんについてしまうと、今までの母親とは「全然」違う態度で「ごめん、ごめん」と言ってスカートを拭いてくれた。立場が逆転してAさんをケアする、自然と出た母親としての行為に、想定外であったが嬉しかったと表現する。自分に対する呼び方も、「助産師さん」ではなく「私、おばちゃん」なんですと、母親との距離感を示す表現として肯定している。母親にとっては育児に困ったときに「すぐに相談できる」存在としてAさんがいたために、すぐに電話することができた。

A: しばらくしてまた電話したときに、『大丈夫?』って『うんち出るようになった?』とか、『育児大変じゃない?』とか言ったら、『おばちゃん、私ね、もう大丈夫やから』って『なんかあったら電話するからもう大丈夫やで、電話してこんでも』って言うてくれたんです。でも最初の印象と全然違ったので、こうなんか、こっちが一生懸命、こういうんな、赤ちゃんのためにこうやって、教えてあげるって言ったって、ちょっと変ですけども、なんかそういう気持ちが伝わったのかなと思って、すごくそれ、うれしい症例やったんです。(・・・) こう信頼してもらえっていう関係になると、お母さんも誰かにこう頼れるんだなっていう場所があるとね、自信持って育児ができるのかなと思ったり。(p8)

その後しばらくしてAさんが電話をしてみると、その母親は、さらに自律した育児ができる母親へと変化していた。「信頼してもらえっていう関係」になると、「自信持って育児ができるのかな」と語っている。母親にとっては困ったときに、電話1本で〈すぐに〉来てくれるAさんの存在は、これからの育児でも困ったときには〈すぐに〉頼ることができるという経験となり、Aさんが「電話して」こななくても、なんかあったときには自ら「電話するからもう大丈夫」と言えるのである。この事例ではAさんの「つながって」いく実践から「母親の変化」が描かれている。「すぐに相談できる」助産師の存在は、自信をもって自

律した育児ができる母親へと変化をもたらすことが示された。

ここで相談して頼ったのは A さんであったが、語りの最後に母親が頼れる「誰か」を強調している。前述(3-1)でも、母親が〈つながる〉社会の「誰か」について語っている。A さんは助産師として、「すぐに相談できる」存在になろうとするが、母親が相談できる互換可能な「誰か」の存在が必要だと考えていることがわかる。つまり母親が社会という場所に開かれた「誰か」とつながることが重要であると考えるのである。

3-4 夜中の SOS に応える

この事例は 1 人目の時から「私のことを知って」くれていた事例であった。最近生まれた 2 人目の育児でも「メンタル的にかん」感じになっていたため数回の訪問を行った。今回の訪問では、1 人目の関わりでは知り得ていなかった母親の「リストカットの跡」という過去も知るようになる。次の語りは「リストカットの跡」について、A さんが母親に問いかける場面である。

A : 最初っからはそういう話はしなかった。2 回目、3 回目の時に、『お母さん、じゃ、そこ、このね、傷があるけど、それはいつの傷なの？』って。まあ、もう跡だったんですけど、で『思春期の頃とか、そういうことがあったの？』って話をしたら『そう』って。で、『結婚してからもあるの？』って言ったら『たまにある』って。『赤ちゃん産む前、妊娠中はどうだった？』とかって言ったら、もうぽつぽつ話してくれはったんです。で、最後がですね、『首吊りのまねまでした』っていうとこまで話があったんですよ、『もうしんどくて』って。で、『そういうのはご主人は知ってるの？』って言ったら『知ってる』、『うん』、っていうので、保健師さんにつないで、『できたら病院行かない？』って言って。で、メールがね、直接、保健センターを通してじゃなくて、私の個人の最初(1 人目)の母乳マッサージの時のあれ(メールアドレス)で、メールが来てたんですね。『ちょっとしんどいです』って言って。(p12-13)

「リストカットの跡」は初回訪問時に気づいていたが、「もう跡」と過去の出来事であることを察知して、意図的に「そういう話」はしなかった。そして 2, 3 回目の訪問時に A さんの問いかけによって、母親は「ぽつぽつ」と話した。この A さんの問いかけは、母親の「しんどい」過去を〈知る〉ことであり、母親にとっては話すことで、「しんどい」過去を〈知ってくれている〉A さんの存在を〈知る〉ことになる。そして、とうとうしんどくなった母親は「ちょっとしんどいです」と自ら A さんに連絡をする。それは「すぐに相談できる」存在として A さんを〈知っていた〉ことを示している。「知ってる」ことには、母親と A さん双方が主体として捉える状況がある。

その後母親は保健センター経由で病院を受診する。しかし母親は「母乳を飲ませたいから薬は飲みたくない」と言って内服はしていなかった。そして夫の育休が終了する前夜に過換気症候群による意識消失で救急搬送された。搬送先の医師から内服を勧められた夫は「どうしたらいいですか」と A さんに夜中にメールで相談する。A さんは話を聞き、翌日に担当保健師につないで受診の手配をすることを伝えた。この出来事について次のように語る。

A: 次の日にはその担当の人に言っ、その担当の保健師と一緒に付いて、受診をしてお薬もらってっていうことがあったんですね。だから、いくらこう、この人が担当の保健師さんですよって言っても、時間内だったらつながるけど、そうじゃないときに頼れる人っていうのも、すごく求めてる人もいてるんだなと思って。(・・・) なんかそういう人たちがなんか、よく自殺したりとかしはるときに、いのちの電話とかかっていっても、かけないですよ。(・・・) なんかいつも『なんかあったら連絡ちょうだい』っていう、もう顔を知った人がいないと、到底あんなところに相談するのは本当の一握りやと思って。その辺がね、ちょっと矛盾してるなっていつも思うんですけどね。なんかまあ、その人がたまたまご主人がそうやって連絡をくださったし、なんかこう、SOS 出したりとかアクションを起こしてくれたのでよかったなって思うケースは案外あるんですけどね。そこに至るまでが、やっぱりこうスルーされてるところもいっぱいあるかなと思って。(P13)

夫の SOS も A さんに出された。それに対して A さんは、「ちょっと矛盾」していると思う。矛盾の一つは「時間内」ならつながるが、タイムリーにはつながれない「時間」の制約である。その制約のなか、A さんは「朝まで」の段取り(p13)を伝える。「朝まで」の「一晚」という時間をどのように過ごすのかを具体的に伝えることで、夫も「ちょっと、いったん落ち着」いた(p13)。それは離れていても〈つながり〉を実感できる A さんの存在があったからである。

もう一つの矛盾は「知った」人、「頼れる」人がいないと、いくら「なんかあったら連絡ちょうだい」と言われていても、SOS を出す行為には至らないことである。「もう顔を知った人がいない」と、到底「相談するのは本当の一握り」という、「いのちの電話」に対する葛藤は、いのちの極限状態にどうしたら〈つながれる〉のかという問いである。母親や夫が極限の状況でタイムリーに頼ってもいいと思える〈知っていて〉くれる人にしか、SOS は出されないのである。「顔を知った人」とは、その母親の「しんどい」過去を、「しんどい」と〈知って〉いる存在である。母親にとっては〈過去を知っていてくれる〉から SOS が出せたのである。お互いに「知ってる」という状況から、過去のしんどい体験を聞くという A さんの行為によって、さらに〈つながり〉が深くなる状況が読み取れた。

この 2 つの事例からは、母親の心配事の電話に〈すぐに駆けつける〉実践と、〈夜中の SOS に応える〉実践が示された。母親たちは A さんを「すぐに相談できる」存在として知っていたから、自ら SOS を出して〈つながった〉。つまり「すぐに相談できる」助産師の存在が、母親たちの SOS を出す力を後押しするのである。一方、「スルーされてるところもいっぱいある」と語る。だから A さんは「すぐに相談できる」助産師であろうとし、そして母親が社会の「誰か」と〈つながる〉ように関わっていくのである。

A さんが示す「すぐに相談できる」存在としての助産師とは、〈母親の味方〉であることを伝えることと、母親から見える助産師の「印象」を意識することであった。そして、そのような助産師の存在を母親に〈知っていて〉もらうことで、〈母親と社会をつなげる〉ことが成り立つのである。

IV. 考察

本研究の結果、【社会とつながると母親たちは変化する】、【母親とどのように「つながっ

て「いくのか」】、【「すぐに相談できる」存在としての助産師】の3つのテーマが見出された。

【社会とつながると母親たちは変化する】という経験から、〈母親と社会をつなげる〉ことが、Aさんの実践の土台となっており、【母親とどのように「つながって」いくのか】という方法と、その実践を支える【「すぐに相談できる」存在としての助産師】という構造が明らかになった。

Aさんたちが提供する〈母親たちが集まれる場所〉は社会の「誰か」とつながる場所であり、母親たちの居場所である。そこに「居ることができる」という存在の肯定の連続性は、物理的な環境の連続性と内実をともなった人間関係の連続性という条件に支えられる(村上, 2021)。Aさんによる母親たちの〈つながる場〉の提供や、母親に助産師の存在を〈知ってもら〉ことは、この条件を満たすものであり、〈母親の変化〉は存在の肯定によってもたらされると考えられる。つまり母親は居場所を見つけることで、母親としての存在を自ら肯定し育児に自信が持てるようになる。またその〈母親の変化〉は、〈母親と社会をつなげる〉支援を実現化しようとするAさんの実践の拡がり支えられていた。そして母親がつながっていく「誰か」の存在は、専門職だけではない、母親同士や喫茶店のマスターといったコミュニティにまで拡がりをもつ。これは「見守りの同心円」と呼べる構造の成立(村上, 2021)であり、その場に居る「誰か」から見守られていることが、孤立から母親を〈社会につなげて〉いくのである。

このようなAさんの実践は、地域保健センターと開業助産師という2つの活動拠点を持ち、Aさん自身が行政や地域社会とつながり、ネットワークを持っていることに依拠している。言い換えると、地域助産師が地域に根差して実践するには、本研究で示されたような地域でのネットワークづくりが必要であると考えられる。

次に「すぐに相談できる」存在としての助産師について考える。Aさんの実践からは、〈母親の味方〉であることが示された。では〈母親の味方〉であることを母親はどのようにして感じるのか。自分が誰の立場に立つのかという立場性こそが重要で、援助者・専門職の立場性は即座に見抜かれるといい、「味方になる立場性」が重要(信田, 2020)という。Aさんの実践で示されたのは、〈母親の味方〉であることを伝え、母親から見える助産師の「印象」を常に意識した先入観を持たない実践であった。母親目線で〈母親の願い〉を受け取り、母親の経験している状況を母親側から捉えるといった、間主観的な捉え方が、Aさんの一貫した実践スタイルであり、母親の立場に立った実践であった。助産師が行う養育支援訪問では、対象者との関係性作りの大切さと難しさが報告(谷郷ら, 2018)されているが、本研究で示されたような、母親目線の実践スタイルは、対象者との関係作りへの示唆となり得る。そして、〈母親の味方〉であると感じられる助産師の存在を母親に〈知ってもら〉ことで、「すぐに相談できる」ことが成り立つと考える。

また育児でちょっと困ったときや、夜中にどうしようもなくなったときに、タイムリーに相談できる助産師の存在は、母親たちのSOSを出す力を後押しする。困ったときに誰かに助けてと言える「援助希求能力」の乏しさは、さまざまな領域の困難事例に共通する特徴で、それには成育歴上の逆境的体験が関与している。誰かに助けを求めるという行為は無防備かつ危険であり、時に屈辱的である(松本, 2019)。だからこそ、母親たちの「援助希求能力」を高めるという視点ではなく、「すぐに相談できる」助産師の存在を、母親たちに〈知ってもら〉という視点が必要なのだと考える。子ども虐待予防のような、こころの問題を

扱う援助では、「援助関係」が重要な手段として、「この人なら相談できる」と思えることが虐待を予防する(鷲山, 2020). つまり「すぐに相談できる」助産師の存在そのものが重要で、援助関係の形成が虐待予防に関与するのである.

他方で、Aさんが捉える母親の姿から考えると、自ら社会とつながる母親、支援することのでつながる母親、つながることができない母親という、いくつかの層があることがわかる。だが、この層は母親の置かれた状況によって流動的であることが、虐待事件を記述したルポ虐待(杉山, 2013)で示されている。この事件の母親は主婦時代、行政が提供するすべてのプログラムに参加し、ママサークルの立ち上げにも一定の役割を果たす、〈自ら社会とつながる〉母親であった。しかし離婚後ひとりで育児を行うようになり、うまくいかなくなったとき、公的機関にはアクセスできなくなり、社会が自分を助けてくれるということに確信が持てなくなかった(杉山, 2016)という。

たとえ今すぐには、つなげる支援が必要のない母親であっても、何かのきっかけで育児環境が悪化すると、簡単に社会から孤立してしまうのが、特定妊婦と言われる母親たちだと考えられる。だからこそ、本研究で示されたような「すぐに相談できる」存在としての助産師が必要で、母親が社会の「誰か」とつながっていくことを支援する必要がある。

本研究は地域で活動するひとりの助産師の経験から、特定妊婦と関わる実践を現象学的に記述したものである。今後さらに、他の地域や周産期施設での実践を紐解いていくことが必要と考える。

謝辞

本研究にご協力してくださいましたAさん、ご指導くださいました大阪大学大学院教授、村上靖彦先生、ご意見をくださいました大阪大学人間科学研究科「哲学と質的研究」ゼミの皆様へ深謝いたします。

引用文献

- 厚生労働省(2019). 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第15次報告).
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課(2013). 子ども虐待対応の手引き(平成25年8月改正版).
- 松本俊彦(2019). はじめに. 松本俊彦編. 「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか. 1-3. 日本評論社.
- 佐野信也(2020). 関係形成が困難な親の理解と支援—虐待(あるいは不適切な養育)を否認する親とのつき合いと折り合い. 世界の児童と母性, 87号, 7-11.
- 内村真由美, 宮川めぐみ(2019). 総合周産期母子医療センターに勤務する助産師・看護師の未受診妊婦に対する思い. 母性衛生, 59(4), 786-792.
- 佐藤睦子, 上野昌江, 大川聡子(2021). 児童虐待予防においてかかわりが難しい母親との信頼関係構築に着目した熟練保健師の支援. 日本公衆衛生看護学会誌, 10(1), 3-11.
- 西村ユミ(2014). 第3部 現象学的看護研究の実際. 松葉祥一, 西村ユミ編. 現象学的看護研究—理論と分析の実際. 92-150. 医学書院.
- 村上靖彦(2013). 摘便とお花見 看護の語りの現象学. 医学書院.
- 村上靖彦(2017). 看護学の知をどう構築するか 多領域の視点から 経験の流れを内側から捉

- える知 現象学と他の方法はいかにして補い合うのか. 看護研究, 50(4), 325-329.
- 村上靖彦(2019). 甘えのケイパビリティー-大阪市西成区における母子訪問事業から-. 世界の児童と母性, 86号, 54-59.
- 村上靖彦(2021). 交わらないリズム - 出会いとすれ違いの現象学. 青土者.
- 信田さよ子(2020). いまふたたび「女性であること」を考える. 信田さよ子編. 女性の生きづらさ-その痛みを語る. 2-16. 日本評論社.
- 佐々木美果, 小林康江(2020). 特定妊婦に関する国内文献の動向と看護における課題. 山梨県母性衛生学会誌, 19, 16-23.
- 杉山春(2013). ルポ虐待-大阪二児置き去り事件. ちくま新書.
- 杉山春(2016). 虐待に至る現在の若いママたちをそこまで追い詰めた過程. 助産師教育ニュースレター第86号. 公益社団法人 全国助産師教育協議会事務局.
- 谷郷智美, 川村千恵子, 寺井陽子, 他(2018). 養育支援訪問事業で訪問助産師が行っている自身の支援に対する認識. 日本助産学会誌, 32(2), 159-168.
- 上野昌江(2019). 子ども虐待予防における看護職の支援. 上野昌江編. 子どもを虐待から護る. 3-19. 日本看護協会出版会.
- 鷺山拓男(2020). 子ども虐待予防「取り締まり」か「援助」か. 保健師ジャーナル, 76(5), 352-356.

Abstract

This study aimed to clarify and describe phenomenologically what kind of support the midwives provide for socially vulnerable pregnant women. We phenomenologically analyzed the stories recounted by Midwife A, who is active in the community. We found that because of Midwife A's experience, <Connecting mothers with the society> has served as the basis of her practice, and the support she provides is based on [How to "connect" with a mother] and [Midwives being "readily available for consultation"].

Midwives being "readily available for consultation" show a practical style that makes them feel like "a mother's ally", and by having mothers "know" about the presence of such a midwife in their lives, they can establish that the midwives are "readily available for consultation". Furthermore, midwives who are "readily available for consultation" encourage mothers to send out SOS signals. When the child-rearing environment deteriorates for some reason, mothers who are called socially vulnerable pregnant women tend to be easily isolated from society. This is why midwives need to be present that is "readily available for consultation" to aid mothers to connect with "someone" in society.

要旨

助産師による特定妊婦への支援は具体的にはいかなるものか、その背景の構造を明らかにし現象学的に記述することを目的とした。地域で活動する助産師 A さんの語りを現象学的に分析した。結果、【社会とつながると母親たちは変化する】という経験から、〈母親と社会をつなげる〉ことが、A さんの実践の土台となっており、【母親とどのように「つながって」いくのか】という方法と、その実践を支える【「すぐに相談できる」存在としての助産師】という構造が明らかになった。

「すぐに相談できる」存在としての助産師では、「母親の味方」であると感じられる実践スタイルが示され、そのような助産師の存在を母親に〈知ってもらおう〉ことで、「すぐに相談できる」ことが成り立つ。また「すぐに相談できる」助産師の存在は、母親たちの SOS を出す力を後押しする。何かのきっかけで育児環境が悪化すると、簡単に社会から孤立してしまうのが、特定妊婦と言われる母親たちだと考えられる。だからこそ、「すぐに相談できる」存在としての助産師が必要で、母親が社会の「誰か」とつながっていくことを支援する必要がある。